

日常生活
PLAINS
INDIAN
VILLAGE
1868



MICHAEL BAD HAND TERRY

Clarion Books

To my parents, Buck and Faye,
Who gave me the freedom and courage to follow my dreams

Clarion Books Copyright © 1997 by Breslich & Foss Ltd
A Houghton Mifflin Company imprint

A Houghton Mifflin Company imprint
215 Park Avenue South, New York, New York 10003

All rights reserved



First published in Great Britain in 1999 by Heinemann Library, a division of
Reed Educational and Professional Publishing Limited

For information about permission to reproduce selections from this book,
Write to Permission, Houghton Mifflin Company, 215 Park Avenue South, New York, NY
10003

Printed in China
First American Edition

Library of Congress Cataloging-in-Publication Data
Available on request

10 9 8 7 6 5 4

Conceived and produced by Breslich & Foss Ltd. London
Series Editor Laura Wilson
Art Director Nigel Osborne
Design Phil Richardson
Photography; Miki Slingsby

CONTENTS

WHO WERE THE PLAINS INDIANS?	4
THE PLAINS INDIAN TRIBES	6
THE HORSE	10
THE FAMILY	12
THE VILLAGE	14
SETTING UP A TIPI	16
INSIDE THE TIPI	18
MORNING CHORES	20
WOMEN'S WORK: FOOD	22
WOMEN'S WORK: CRAFTS	24
MEN'S WORK: HUNTING	26
MEN'S WORK: PREPARING FOR BATTLE	28
MEN'S WORK: WARFARE	30
CHILDREN	32
MEDICINE	34
GOVERNMENT, GATHERINGS, AND FESTIVALS	36
TRADE	38
LEISURE TIME	40
SOLDIERS AND SETTLERS	42
THE VILLAGE IN TIME	44
GLOSSARY	46
INDEX	47
PLACES TO VISIT AND ACKNOWLEDGEMENTS	48

大平原のインディアンとは、 どんな人達だったのか？

1 4,000 年以上もまえに大平原のインディアン達の祖先が、アジアから北米に移住してきて、ミシシッピー川の上流から五大湖地域に住み着いた。そして、東の地域に移住して来たヨーロッパ人たちに彼らの土地から追いやられて、大陸の中央の平原に移ったのだ。（次のページの地図参照）

大平原のインディアンのほとんどは遊牧生活、つまり彼らは一定の場所に住んで、土地で穀物を育てる農民たちではなく、大集団を成して大草原を動き回っているバッファローの狩をし、そして、他の地域の部族と物々交換をしたりして食料を確保しながら放浪していた狩人たちの集まった人たちという意味である。

1880 年代の半ば、移民や、移住者たちが幌馬車に乗って西部を目指して旅をし、大平原のインディアンたちの地域の多くを自分たちの領域だと主張し始め、この時に、合衆国の軍は、この土地のあちこちに砦を築き始めたのだ。大平原インディアンと白人入植者たちとの間の関係は、次第に緊張したものになり、そして、一連の誤解が結局はインディアン部落の虐殺という形になった。このことが、大平原のインディアンと騎兵隊との間の 30 年以上にも及ぶ戦闘のきっかけになった。1876 年に起きた、Little Bighorn での戦いでのスー（Sioux）族とシャイアン（Cheyenne）族の勝利の 5 年間に、この古い時代のバッファローの狩をするという放浪の文化は消えうせてしまった。



Frederic Remington によって描かれたインディアンの戦闘と呼ばれるこの絵に見られるように戦闘は、大平原のインディアンたちの文化のなかで重要な役割となっていた。



大平原のインディアンの協議会合。

1878



左：大平原のインディアンの異なる部族の居住地域を示したアメリカの中央部大平原

下：大平原のインディアンにより居住されていた実績のある地域を表した現代のアメリカ。



大平原インディアン部族

大

平原インディアンには、約 30 ほどの異なる部族が居るが、彼ら全体での人口

は、200,000 以上であることはない。ある部族の間では、似たような言葉や発音ではあるが、全ての部族は別々の言葉で喋っていた。スー族のような大きな部族は、いくつかの下位部族（ラコタスー、ナコタスー、そして、ダコタスーなど）に分かれており、それがまた、さらに纏まって狩猟集団と呼ばれるような更に小さな集団に分かれていた。

人々は同じ集団の中では結婚することが出来ず、そして、男が結婚する時には、彼は普通彼の妻の集団に移って生活をしていた。

右：北部シャイアン族の戦士

人間の髪の毛で縁取りされた彼のシャツとレギングが彼は、戦闘集団のリーダーであることを示している。



シャイアン族

シャイアン族は、1700 年代の半ばに大平原に移ってきた。1820 年台の半ばに彼らは二つの部族に分かれた。すなわち、今のモンタナやワイオミング地域に住んでいる北部シャイアン族と、今のオクラホマ、ネブラスカ、そして、カンザスあたり住んでいた南部シャイアン族だ。シャイアン族全体の人口は、およそ、3,000 人程度。

1830 年代から、シャイアン族は、ラコタスーの部族とは友好的になった。彼らの年来の敵は、ウテ (Ute) 族、ポウニー (Pownee) 族、クロウ (Crow) 族、そして、ブラックフィート (Blackfeet) 族だった。

ラコタスー (Lakota Sioux) 族

ラコタ族は、この大平原にのうちの一つだったが、しか活習慣に適合して行った。彼な、勢力のある部族で、 大きな影響力を持っていた。

このラコタスーの戦闘員は、石斧を持っている。彼の頭の飾りは、オコジョの皮と、バッファローの角、そして、鷲の羽で出来ている。

移り住んできた一番あとの集団し、彼らは直ぐにこの新しい生らは、**12,000** もの人口の大きな平原の部族たちの文化と政治に

戦闘集団のリーダーを示す槍と

右上: 南部シャイアン族のドッグマン。 彼の頭飾り、ガラガラ蛇の持ち物、化粧のデザイン、そして、飾り帯は、彼がドッグ社会、これはシャイアンの社会特有の集団となったものだが、警察と軍隊の組織のその一員であることを示している。

右下: 南部シャイアン族の女 彼女の鞍と模様の描かれたバッファローの毛皮を持ち、部族での儀式のために彼女のもっとも素敵な衣装を身に着けている。



右及び中： ブラックフット族の
グリズリーベアの格好をした男

下：このクロー族の男は、斧と一緒に
なったパイプを持っている。彼の
衣装は、かれが戦闘で鉄砲を手に入
れたり、戦闘集団を指揮し、馬の略
奪に目だった功績を上げたことを示
している



クロー族

部族の人数はおよそ 4,000 人のクロー族は、イエローストーン川沿いに住んでいた非常に芸術性に溢れた人たちだった。彼らの昔からの敵であるブラックフット、シャイアン、アラパフォ、そして、スー族などに囲まれて、クロー族は白人の入植者たちの味方になった。



ブラックフィート族

スー族と同じように、ブラックフィート族は三つの主な集団に分かれていた。部族には、およそ 18,000 人がおり、彼らは南アルバータ、カナダ、そして、モンタナの西部に分布していた。この地域には豊富な草と水があり、バッファローの群れを見る事のできる最後の地域の一つだった。

た。ブラックフィート族は、サルシ族（800 人くらいの小さな部族）や時にアトシナ族（3,000 人）以外とは同盟を結ばず、いつも、他の部族と闘争を繰り返していた。ブラックフィートは、“グリズリーベア男”として奉仕する二人の男を毎年選出する **Braves'** 社会というものを

もっていた。こうした男たちは、いつも矢面に立ってグリズリーのように勇猛に敵と戦う戦士でなければならなかった。儀式のときや、戦闘に出向くときには、彼らは熊の毛皮で作った腕帯、熊の爪のネックレス、熊の毛皮の帯、そして、二つのグリズリーの爪で出来た特種な頭飾りをつけていた。

右： このブラックフィート族の女性は、トラバスを持っている。木で出来た、A 文字の枠組みは、馬とか犬の背中に固定して、荷物を載せて運ぶ。そして、動物が前に進むと、二つの柱がその後ろに引きずられていく。大平原のインディアンたちは、次々と場所を移動する時、自分たちの持ち物を運ぶのにこの道具を使う。

馬



左: 戦闘馬の馬ろくにつけられたスカーフ、もしくは、垂れ幕は、この馬が以前に戦闘に乗られて行ったことを示している。

1,500,000 から 600,000 年前の間に、この時代に二つの大陸を結びつけていたベーリング陸橋を渡って、現代の馬の祖先がアジアから、北アメリカ大陸に移住して来た。しかしながら、彼らはこの新しい世界では消滅してしまい、そのために、彼らが 1500 年代にスペイン人たちによりメキシコに再び移入されてきたときまで原住民たちには知られていなかった。

この馬の出現が、それまで移動するときの荷物の運搬を犬に頼っていた大草原のインディアンたちの生活を一変させた。馬は犬に比べ、一度にもっとずっと沢山の荷物を運ぶことができるので、大平原のインディアンたちは、もっと大きなティピーを作ることが出来るようになったし、沢山の食料を蓄えることが出来るようになった。そしてなおかつ、以前よりもより遠くまで、そして、迅速に移動することが出来るようになった。子供たちは、小さな頃から馬を乗りこなすようになったし、男の子も女の子も馬に乗ることを教わっていた。

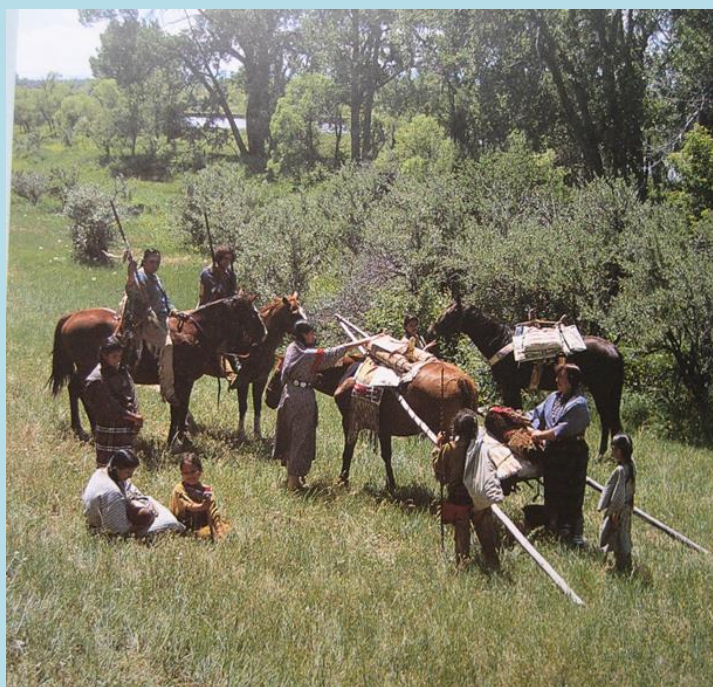


馬での狩

バッファローは大きな動物だけれど、彼らはとても速く走るし、だから彼らを走って狩をする時には、彼らを崖に追い込んで、谷に落ちて死んだそれを捕まえると言うのが術だった。こうした時に馬が手に入ったということは、バッファローを追いかけて、そして、夫々の男が一匹、あるいは、二匹を狙ってしとめることが出来るようになった。速くて、従順な馬と言うのが狩の成功を齎す基準だった。

戦闘の中での馬

裕福な家族は、30頭くらいの馬を持っていたと思われるが、しかし、たった一匹、もしくは、二匹が居れば戦闘に出かけるにはそれで十分だったのだろう。戦士、もしくは、狩人にとって、成功は、速くて、良く訓練されており、長いいななきの、そして、勇敢な馬次第だ。うまく馬を操ることが出来ることが非常に重要である。とりわけ戦闘では、馬上に乗っていることが生き残ることを意味している。一落馬したり、引きずられたりすることはまさしく死を意味していたのだろう。



最も巧みな馬の乗り手は、戦場の激しい戦いの中で馬から落馬した仲間を疾走する自分の馬の後ろに救い上げていた。彼らは、彼らの馬の周りに滑り込み、そして、そこに宙吊りになって敵の鉄砲の弾や矢からわが身を守る。

キャンプを移動するインディアンの家族 馬のうちの一匹は、家財を積んだトゥボーイを引っ張っている。

右: 大平原のインディアンは達はいずれも、彼らの馬ろくをバッファローの毛皮や髪の毛を編んでついたり、白人の貿易商が齎した金属の鉄砲の弾などで飾った馬ろくを使っている。



家族

時

は、1868 年北シャイアン族の戦士 Real Bird と彼の家族がモンタナ州の南東部にある平野に住んでいる。家族というのは平原インディアン文化にとって非常に重要なもので、夫々の者が果たすべき独自の役割を持っている。もし、子供が戦士や狩人として手柄を上げれば、あるいは、女の子が家の中のことや手仕事でいいことをすると、このことがそれぞれの家族にとって富と繁盛を齎し続けることになるだろうし、それは、究極には部族のためにもなる。



上左： 小屋のリーダーであるおじいさんは、家族のなかの精神的な要請の面倒を見ている。彼は、偉大な戦士であり、そして、若い男たちが彼のところに忠告を求め、過去の戦闘での彼の手柄の話しを聞きにやってくる。
上右： りりしい心の女性であるおばあさんは、家庭の中の仕事や手仕事の素晴らしいやり手で、彼女はこうした術を彼女の孫たちに教え伝えている。彼女は、Real Bird の妻たちが彼らの仕事をきちんとやっているかどうか常に監視している。

一夫多妻制

Real Bird は一夫多妻主義者であるが、このことは、彼は、妻が一人だけでないことを意味している。彼の部落のほとんどの男たちは、二人、ないし、三人の妻を持っており、とても裕福な男たちのなかには8人以上の妻をもっているものもある。ある男がふたり、三人の姉妹と結婚して

いるということも普通のことである。大平原のインディアンが一夫多妻である一つの理由は彼らの社会の好戦的なしきたりによっている。狩で事故に会ったり、戦いで戦死は、男性の数が女性の数より少なくなることの意味している。女性は普通、14才か15才くらいで結婚し、

男たちは二十歳になると結婚する。女たちは、物々交換用の毛皮を作ったりして家族の富に貢献するが、彼女たちは決して、進んで沢山の子供を作ろうとはしない。大平原で食料を確保することは難しいし、また、沢山の人口になることは、みんなが飢餓になることに通じるからである。

下: Real Bird の二人の妻は Sees the Berries Woman(左)、 Pretty Plume Woman(右)だ。Sees the Berries Woman は、南シャイアン
の女性で、年上の妻で、彼女には、10 歳の Rides the Herd
(下右)と言う息子と、8 歳になる Does Well (下中央)
と言う娘がいる。Pretty Plume Woman の娘は Two histles (下
左)で6 歳になる。



前ページ:Real Bird
は経験豊富な狩人
で、彼の家族に沢山
のものを確保してい
る。彼は又、長け
た取引人であり、か
つ、レースをしたり
狩をするための素晴
らしい馬を飼育して
いる。

上: Real Birds の最年長の息
子、Eagle that Sings は、最初
の妻の子供で、既に死亡して
いる。生きていれば今17歳で
ある。Eagle that Sings は、彼は
結婚が出来るような十分な馬
を確保する前に、数年間を馬
略奪の襲撃や、戦闘集団に加
わらなければならない。彼の
父と違い、Eagle that Sings は、
白人たちの衣服の一部を使っ
た新しいスタイルの着物を好
んで着ている。

村

大 平原のインディアンたちのほとんどは、農業ではなく狩猟によって食料を確保しており、このことは、彼らが次々に場所を移動しなければならないことを意味している。夫々の部族は、集団と呼ばれるいくつかの小さなグループに分かれている。全ての集団が儀式や祝賀のために一緒に集まる一年のうちの決まったとき以外は、かれらは別々に生活していた。夫々の集団は、すばやく移動できるように小さなものでなくてはならないし、また、食料も沢山携えていないのが通常であるが、狩猟をするに足るだけ、あるいは、敵の部族から村を守るだけの十分な男たちの数を確保する大きさが必要である。



中央:キャンプの設営。Real Bird と 彼のパーティの他の者たちが新しい場所に到着した。男たちが馬に水をやっている時には、彼らはゆとりがあり、パイプでタバコをすっており、一方、女たちは、ティピーを組立て（16 ページ参照）、昼食の用意をする。このあと、子供たちは遊ぶことが許され、そして、Real Bird と彼の妻達は知人のところや、その他の家族のところを訪問する。

上: 一緒に移動する大平原のインディアンの小さな集団は通常、もし、川を見つけることが出来れば、その川の近くにティピーを設営する。もし、全体の部族が儀式のために集まったり、あるいは、近くに敵の部族がいると思われるようなときには、彼らは、ティピーを密接させたり、あるいは、一つの大きな輪になるように配置する。酋長や戦士の組のティピーはよく、この村の真ん中に置かれている。



ウィキアップ

家族のティピーは、しばしば 場所が狭くなる。座ったり、おしゃべりをする自分たちの場所を確保するために **Eagle that Sings** のような若い戦士たちは、ウィキアップと呼ばれる小枝で覆われたあばら屋を自分たちで造る。



上: 移動するときには、大平原のインディアンたちは、彼らの食料と家財道具をパーフレッチェと時に呼ばれる、これは、バッファローの毛皮で作られ、装飾された物であるが、これにつめている。



移動

Real Birds と彼の家族が荷物をまとめ、キャンプを移動する準備をしている。非常に小さな家族だけでの移動は安全ではないので、彼らは、自分たちの集団のほかの家族が来るのを待っている。

冬の間は、大草原のインディアンたちは、数ヶ月の間一つのキャンプで過ごす。移動する前には、部族での大掛かりなバッファローの狩猟を行う。こうして、取引したり自分たちの暖をとる上等な毛皮を確保し、それ以後の数ヶ月のために乾燥し、保管する沢山の肉を得るためだけのバッファローを捕獲する。

春から夏、そして秋に掛けて **Real Bird** の集団の家族は、2・3日ごとに場所を移動する。移動するときには、自分たちが、綺麗な水場、薪をとることのできる樹木、そして、馬の食べる草が沢山あるような場所にたどり着くまで、1日あたり8から15マイルくらいの距離でゆつくりと移動する。

ティピーの建てこみ



儀式のためのティピー

家族用のティピーの加え、夫々の部落には、集会やその他の会合をするためのいくつかのやや大きめのティピーがある。これらは、直径が 100 フィートにもなっている。数枚のバッファローの皮で出来たカバーを円形、あるいは半円形の柱と柱に張り渡して覆っているか、または、二つの大きなティピーを向かい合わせにして、夫々の間に毛皮を渡してつなげている。

大 平原のインディアンたちは、運んだり、建てたりするのに容易な、丈夫で軽い建物が必要で、それには、バッファローの毛皮でできているティピーは彼らの遊牧生活には理想的なのだ。馬の時代が来るまで、平原のインディアンたちは彼らの荷物を引っ張るのに犬しか居らず、従って彼らのティピーは直径が 8 から 12 フィート程度だった。馬が、もっと重いものでも運べるので、彼らを使えるようになると、ティピーの大きさは、だいたい 14 から 17 フィートほどに大きくなった。

伝統的に、家族のティピーは、その中のものや、家具なども含め、女の持ち物である。それを運ぶのも、そして、新しいキャンプに到着して、これを設営するのも彼女たちの仕事なのである。

下： ティピーを設営するための小道具。 この騎兵隊の食料袋には、ティピーのカバーを固定するための木製の杭と、これを大地に打ち込むエルクの角で出来たハンマーが入っている。細いスティックは、編み物をするピンである。





1 ティピーの骨格は、ロープでくくられた3ないし4本の木の柱で出来ている。まず、この骨組みを建てて、その三角形の頂点のくくられたところにその他の木を寄せ掛ける。Pretty Plume Woman がその柱のてっぺんの端に風向きを示すようにかざす布をくくりつけている。



2 のこりの柱がこの骨組みの真ん中の結び目のところに次々の立てかけられていく。全ての柱を立てかけると女たちは、毛皮のカバーを広げる。バッファローの毛皮で出来たカバーは、150lbsの重さにまでなるので、いつも二人の女が一緒になって働く。

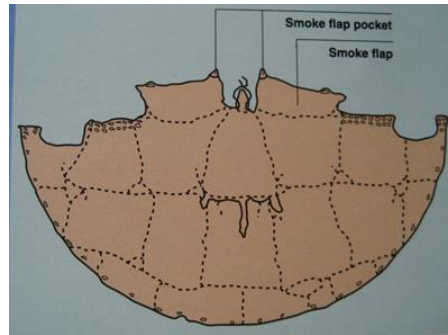


3 女たちは、重いティピーのカバーを持って、これを三角形にかけ、大地に固定されたティピーの柱に結んでいく。最後の柱は、ティピーの後ろの位置に掲げられが、ここは、丁度テントの旗が来るところの反対側になる。



4 女がカバーを広げ（前頁）、それを柱の枠組みの回りに固定している。

上: バッファローの皮で出来たティピーのカバー。 入り口の隙間ように二つの半円形の部分が切り取られている。



5 耳とか女たちの腕と呼ばれる小さな垂れ幕をつけるためにティピーの頭に細い柱がはめ込まれている。これらは、隙間風をふせいだり、ティピーの真ん中の火から出てくる煙を外に逃したり調整できるようになっている。雨が降ってくると、この垂れ幕は閉じられて、水は、ティピーの外を流れ落ちていく。

ティピーのカバーの製作

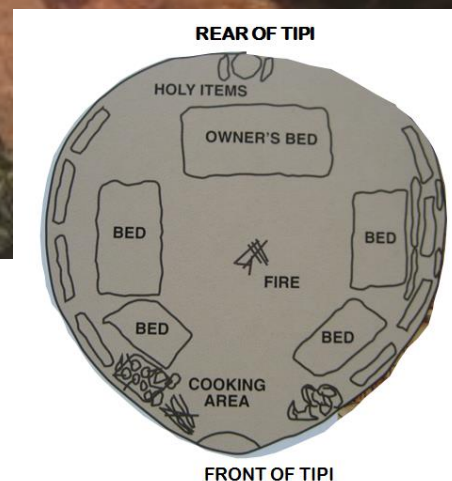
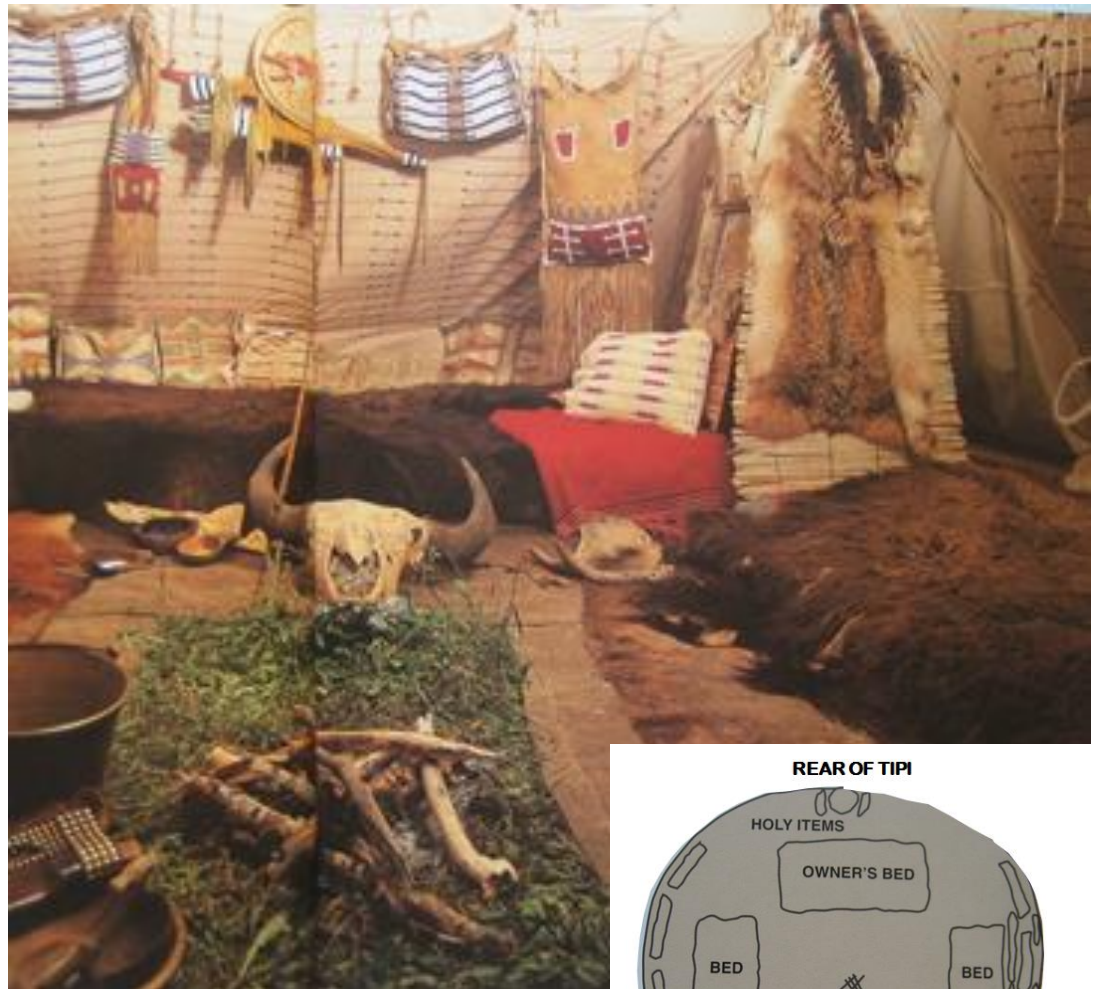
ティピーは、使い古すとつぎはぎをされていたに違いないが、しかし、Sees the Berries Woman や Pretty Plume Woman のような手仕事の上質な女性は、少なくとも一年おきにティピーを取り替えていた。彼女たちは、一つのティピーのカバーを作るのには、8~12枚くらいのなめされたバッファローの毛皮を必要としており、そして、まずそれを綺麗にこすりおとし、それを1日か2日を掛けて図に示されているような形に縫い合わせていく。女たちの友達とか親戚がよくお互いに助け合っている。

戦闘で榮譽を勝ち得た男たちは、しばしばこのティピーのカバーの外側に、戦利品や、夢とかあるいは幻想の中で見た神聖な象徴の絵を描いて飾る。

ティピーの中

1 つのティピーの中に、一家全員が生活するとなると、非常に混雑し、個々人のプライバシーがほとんどない。大人と子供で、11人程度であれば、みんなの衣類、生活道具、武器、そして、食料などと共に一つのティピーで生活できる。広さが十分でないと、これらをきちんとしておくことが基本で、全てのもの、みんなが、夫々がしかなるべき場所を持っている。おばあさんと若い妻は、普通、食料と薪が置かれていて、料理する場所に位置しており、年長の妻は、ティピーの奥のほうに、彼女の夫や客と一緒に場所をとっている。鞍やくつわは、ティピーの中の“男の場所”といわれる所に保管され、男たちの武器は、もし、村が夜に襲撃されても直ぐにそれを手にすることが出来るように彼らの寝床の脇に置かれている。神聖なものは何時でもティピーの奥に置かれる。

右: Real Bird の家族のティピーの内装。こうした感じの非常に良く出来た、また、綺麗に飾られたティピーは、家族のみんなが夫々の分担している役割をしっかりとこなしている結果である。男が狩がうまくなかったり、女が手仕事が出来なかったり、あまり裕福でない家族のティピーは、たんにむき出しの基本的なものだけのティピーとなる。



毛皮のなめし



バッファローの毛皮は、ティピーの外まわりや毛布やバーフレッチと言った製品の両方に使用されているが、それらは、使われる前になめされなければならない。毛皮を作るときに、女たちはまずそれを大地の上にくいで固定し、これを石とか、骨、あるいは金属で出来た道具を使って、両面のこれについた毛とか動物が皮をはがされた後に残っている肉を丁寧に擦り取っていく。そのあと、柔らかくするために、バッファローの脳みそを毛皮

に塗り込んでいく。そして、最後にバッファローの筋で作られたロープで太陽で乾かす間、前後にしっかりと引っ張っておく。



右: 皮をなめすときに使う道具 バッファローの足の骨“肉むしり”

(左)、エルクの角製の斧、そして、エルクの角の肉掻き (右)。



上: ティピーの中のいくつかの家具の中には背宛がある。こうしたものは、皮むきされた柳の小枝から出来ていて、三本の木を組み合わせで支えられている。これに、貿易商が持ち込んできた毛布で出来たシート、アンテロープの毛皮で縫われた枕、そして、バッファローの子牛の皮で作られた頭宛てなどがついている。

朝の雑用

Real Bird と Eagle that Sings が狩に出かける時、あるいは、キャンプを移動する時には、朝はやく出発しなければならない。その他のときには、薪や水を取って来て、肉の煮物やだし汁をつくったりするために Sees the Berries Woman や Pretty Plume Woman がまず最初に起きる。前の晩に、宴会や踊り、そして、友達のところに行ったりしたものはみんな遅くまで寝ており、そして、冬の朝は、だれもがティピーの真ん中にある囲炉裏からしぶしぶ離れて、外に出て行く。

沐浴をした後、Sees the Berries Woman や Pretty Plume Woman は髪に、時には、体に熊の溶けた脂肪と一緒に油をぬる。彼女たちは、1日の仕事をする前に自分たちの髪の毛を編む。夏の期間には、彼女たちは太陽が暑くなるまえに、毛皮をなめすなど、きつい仕事をしようとする。

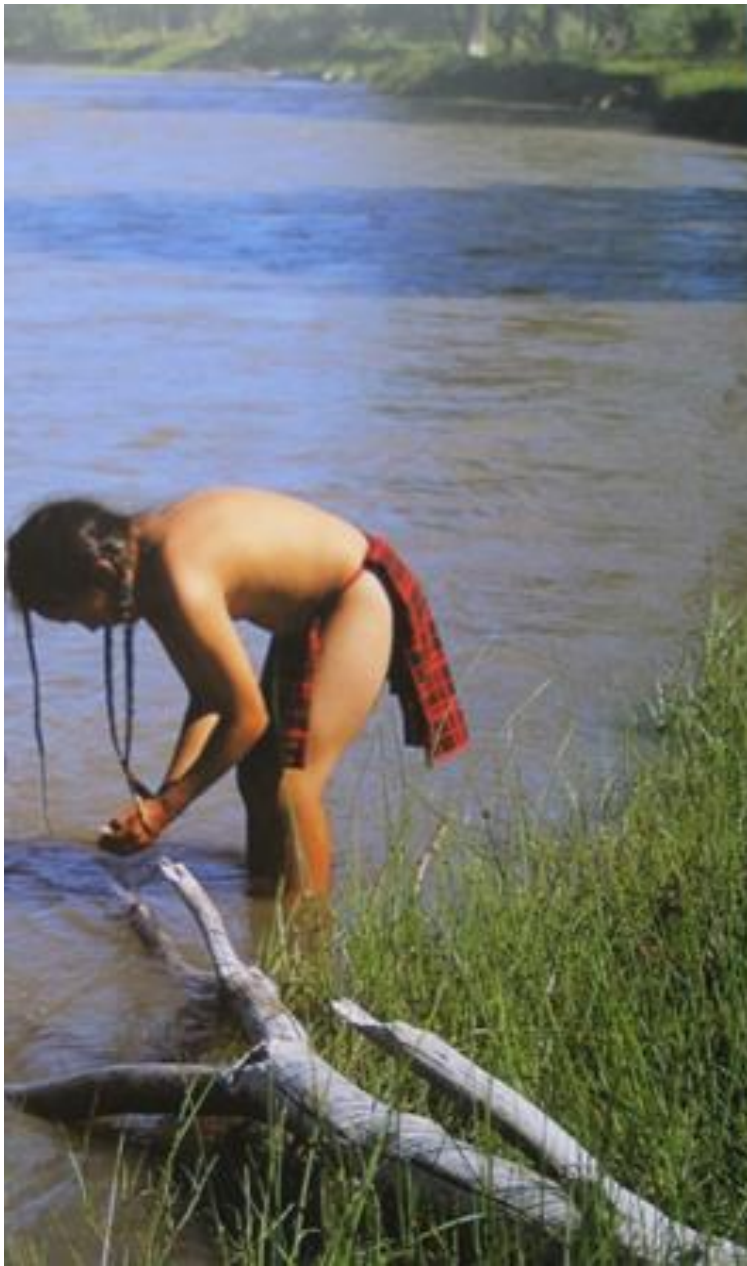
何頭かの馬は、女や子供も含め、個人の所有物ではあるが、これらの面倒を見るのは男たちの仕事だ。起きると直ぐに、Real Bird, Eagle that Sings, そして、Rides the Herd は、馬の状態を見に行き、彼らを水のみに川に連れて行き、そして、よりいい草の生えている場所につれていく。馬は非常に大事なものであり、そして、全ての大平原のインディアンたちが所有しているものの中では最も価値のあるものだから、Real Bird は、常に、盗っ人たちに用心していなければならない。もし、その地域に奇襲してくる敵が居ると思われるときには、彼は、他の男たちに、彼らの馬に餌をやるために草原につれていくのを昼まで待つようにと告げる。

右: 日常使う個人のもの（時計回りに: ビーズのついた鞆、貝殻のイヤリング、ぶつぶつ交換で手に入れたビーズとコインのついたネックレス、そして、ビーズのついたお守り。



上: 狩をしたり、移動したり、そして、仕事をする時の服は、通常、質素で飾りが少ない。特別のとき、例えば、戦闘あるいは儀式のための服は、それを着ないときには、数珠のついた、あるいは、ヤマアラシのとげの鞍袋にいれられている。





上:Rides the Herd が男たちが馬を水場に連れていく手伝いをする前に川で水浴している。

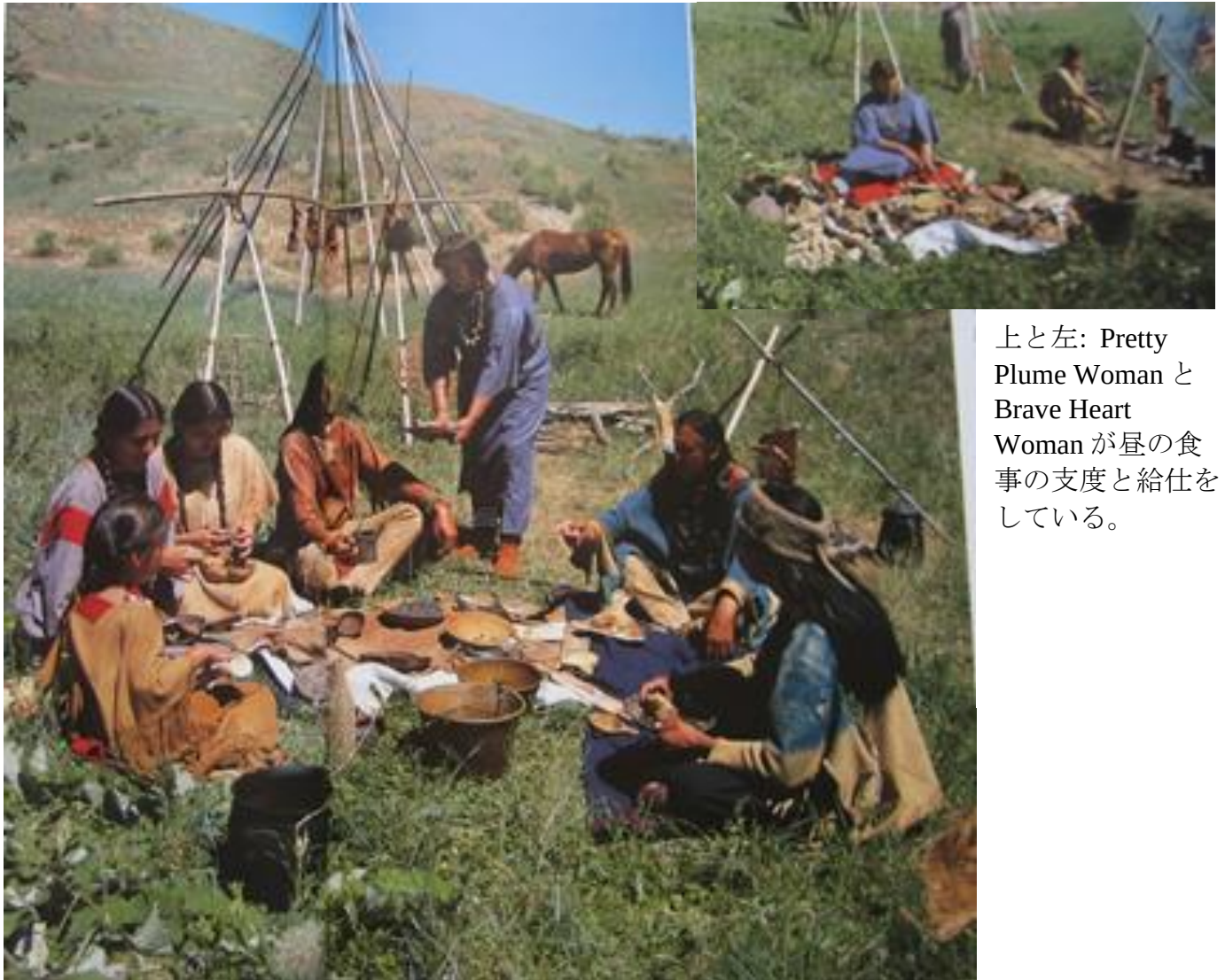


ユッカ

ユッカはいろいろな目的に利用されている：その実は食べることができるし、大きな釘のような葉（上図参照）や、剥きでた根は、火お越しに使われている。皮を剥ぎ、そして、水に浸すと、根の中（下図参照）は、素晴らしい石鹸になる。



女たちの仕事 : 食事



上と左: Pretty Plume Woman と Brave Heart Woman が昼の食事の支度と給仕をしている。

Real Bird と彼の家族は、最初は午前中の中ごろ、二度目は午後のやや遅い時間で、普通 1 日に二度食事をする。こうした食事の用意は、Pretty Plume Woman や Brave Heart Woman が手伝って Sees the Berries Woman によってなされている。大草原のインディアンたちは、彼ら自身の穀物、果物、あるいは、野菜を栽培せず、彼らの食料はごく限られている。食料のほとんどは、男たちの狩猟によるものであるが、しかしながら、女たちは、野いちごのような野生の食料を収穫し、農業をしている他の部族や白人の貿易商と物々交換をしている。

大草原のインディアンたちは、新鮮な肉を味わうことが出来るし、又、時には、狩をしたその場で生で食べる。内臓はとりわけ極普通である。Real Bird は苦味のある膀胱の胆汁と一緒に生レバーが好物だが、鼻の軟骨や新鮮な脳みそ、そして、腎臓など、どれも好きなのだ。しかしながら、大草原のインディアンたちの遊牧生活のスタイルは、彼らの食料のほと

んどは乾燥したものである。これは、保存が利き、場所から場所に移動するときに携帯できるからである。肉を始め、ほとんどの食料は、それらが完全に乾き、そして硬くなるまで熱い太陽の下で干される。彼らは、それを後で水に浸したり、煮て食べられるようにしている。

Real Bird の家族は、ほとんど食器を持っていない。もし、誰かが宴に招待されるようなときには、彼は自分で自分のナイフ、木をくりぬいた食器、そして、バッファローの肩のほねの刃物、あるいはお皿の代わりとなるような毛皮の切れ端を持って行くものと思われる。コップやスプーンはバッファローの骨を削ったものだ。フォークは、知られておらず、肉は、まず口の中に一部を入れて食べ、ナイフで塊の残りから切り離す。食事は普通、水や肉のだし汁を飲みながらする。



左：新鮮な、乾燥した肉に加え、様々なほかの食料が食べられる。（上から下に）：苦味のある木の根；乾燥した草原カブの編み合わされた弦；水を保管するための乾燥したバッファローの膀胱；乾燥とうもろこしと乾燥したかぼちゃの輪切り、これらはいずれも、ずっと東の地域のもっと肥沃なミズーリ川流域から来た部族から得たもの；バラの実、これらは食料が乏しくなったときに食べられるもので、バッファローの肩のとがった部分から出来た皿の載せられている；そして、木のボールに入った乾燥さくらの実

右：火をおこすための女性の道具（上から時計回りに）：火付けガラス（拡大ガラス）；マッチ；火打石のかけら；鞘に入ったナイフ；小物や乾燥した火口を入れる袋は大草原では滅多に見ることはできないが、Lucifersとして良く知られた商品名のマッチ。



女たちの仕事：手工芸

Sees the Berries Woman や Pretty Plume Woman のような良妻は、様々な手工芸の仕事に長けている。彼女たちは、鞍や、荷物を運ぶための入れ物、ティピー、ティピーの付属品、その他、いろいろな小道具と同様、モカシンなども含め、自分たちの家族のための衣服を作っている。日常のこうしたものの他に、彼女たちは、ビーズの工作、毛皮の装飾、そして、ハリネズミのとげの装飾品と言ったような伝統的女性の仕事も修得していた。こうしたものは、ほとんどの遊牧生活をしていた人たちと同様、大平原で生活するインディアンたちは、之を彼らの芸術的な極めを表現する方法としては最も容易な方法と考えていたので、主として衣類の装飾するために良く使われている。

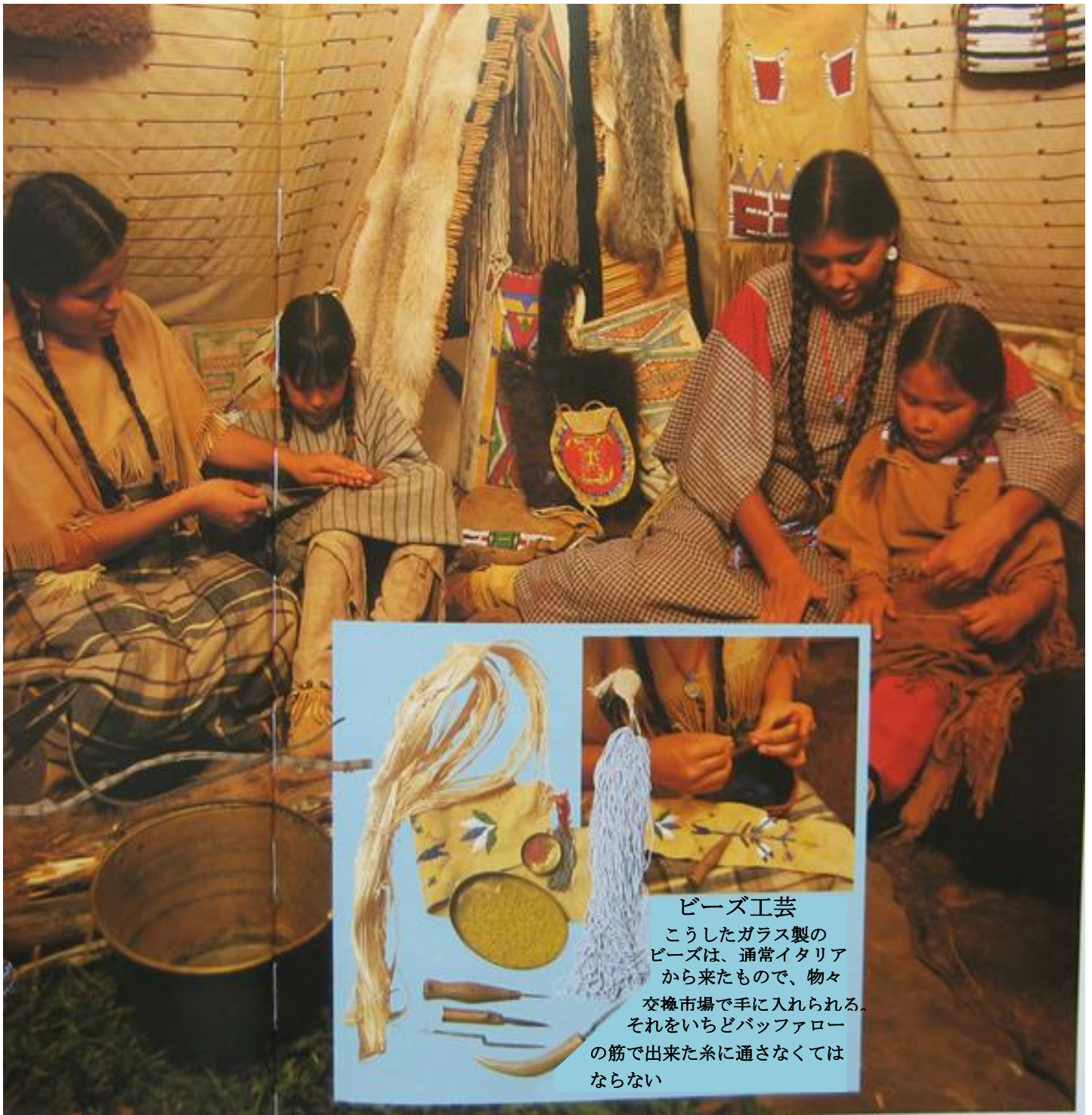


男性にとって長けた狩人であったり、勇猛な闘士であること同様に、女たちにとっては、手工芸仕事に長けていることが重要なのである。

Sees the Berries Woman は、女たちの特別な手工芸職人の組合に属している。最も素晴らしい手工芸を修得した女性だけがこの組合に属することができるのだ。この職人組合のメンバーであることが、Sees the Berries Woman に、部族の中での高い誇りと、ある種のほかの女性では作る事の出来ない宗教的意味合いの持つ小物を作る権利を与えられている。



左： 女性のベルトとビーズ装飾に施された鞘に入ったナイフ



上: Sees the Berries Woman と Pretty Plume Woman が、娘たちに裁縫の仕方を
 教えている。

男たちの仕事：狩猟



家族の長として、Real Birds の主な任務は、食料の確保とバッファローの毛皮を手に入れることである。こうしたことが、彼らが、非常に大きな、よく整備されたティピーで、沢山の物々交換で手に入れた品物と共に、快適に生活するための手段であるからだ。バッファローは大平原で生活するインディアンたちにとって最も重要な獲物である。肉や毛皮に加え、角からひずめに至るまで、動物のありとあらゆる物がインディアンたちの日常生活の中で有用に使われている。



上：馬に乗って弓と矢でうまくバッファローの狩をするためには、乗り手は彼の馬を上手に操る必要がある。



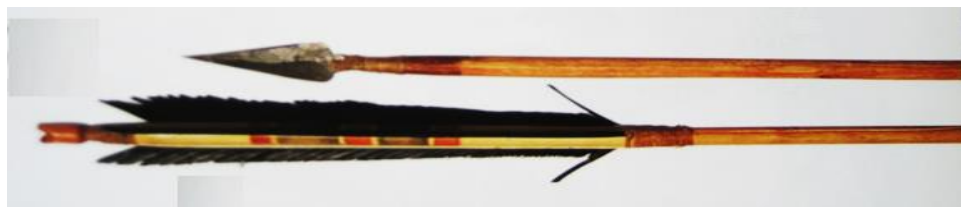
上：全ての男は、彼の馬用の上掛け、あるいは、鞭が必要である。普段の使用には、小枝やバッファローの尻尾が使われる。特別の場合には、ビーズで装飾したエルクの角で出来た腕輪とか、木彫りの施された取っ手などもよく使われている。

左：子牛をつれたバッファロー

右： 武器をつくるための道具類（上から順に）：鋭くとがった石のナイフ；石のドリル；金属製、石、そして、骨で出来た鏃；砥石（右）；動物の腱の束、と膠の棒。ほとんどの狩人、闘士たち全てが自分の使う弓と矢の作り方を知っている。若者達は、時間のかかるこうしたものを作る仕事を余り好まなかったのも、通常、これらのもの作りに専念していたのは Timber Leader のような年寄りである。Eagle that Sings は、バッファローの狩のために自分のエネルギーを蓄えるのを好んだし、また、彼は、新しい武器を手に入れるために喜んで肉や毛皮を交換している。

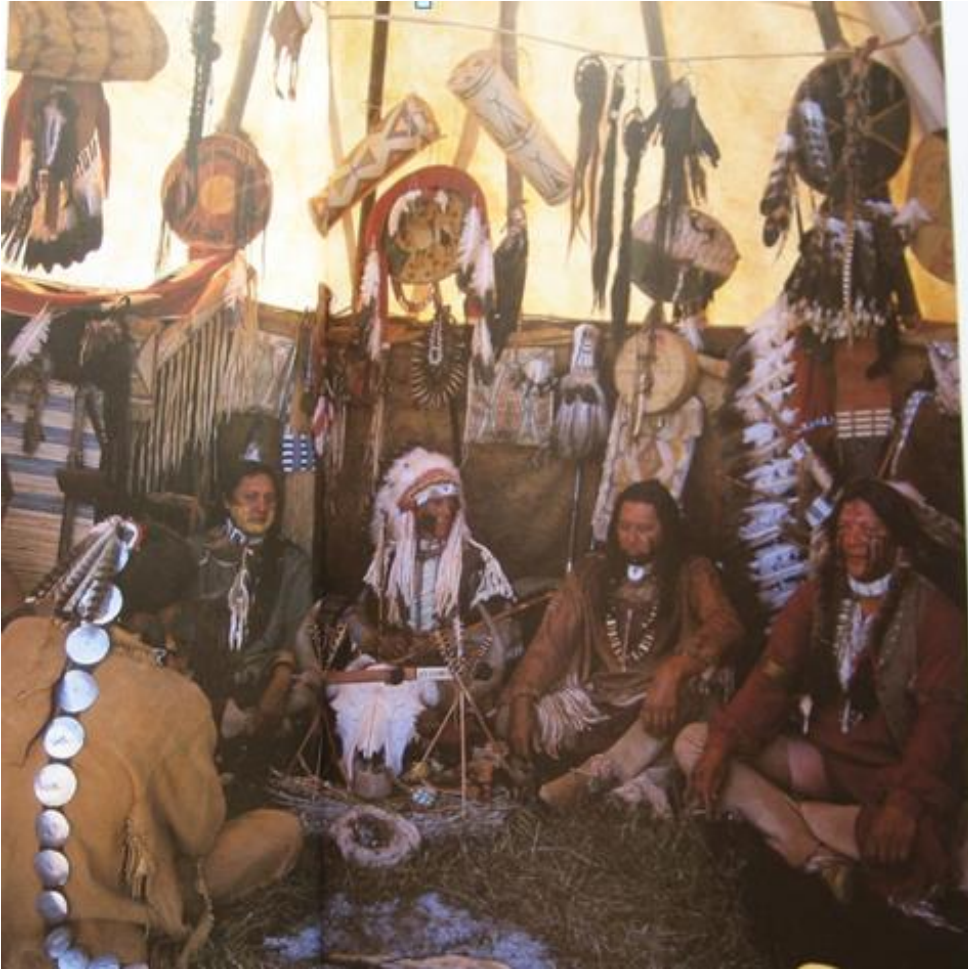


左： 男たちは、自分が暇なときには、彼らの武器を作ったり、修理したりしている。生の骨の棒が湾曲の形に曲げられて、動物の腱で補強され、より強力で頑丈なものになる。弓はエルクやビッグホーンの角からも作られる。



右： 矢は、大体的な狩でどの獲物を誰がしとめたか分かるようにその持ち主が直ぐに分かるように印がつけられている。

男たちの仕事：戦いの準備



大草原に住むインディアン多くの者を駆り立てる部族の戦闘は、一土地を確保し、そして、復讐のためという一いつも同じ理由であったけれども、戦いは、かつ又、彼らの文化の中では非常に重要な意味をもっており、そして、儀式的、精神的な意味合いを持っている。

男たちは、彼らの守護者として見られているし、村を守ってくれるものと考えられている。Rides the Herdは13歳になると、戦闘に行く集団について行き、そして、戦いのやり方を学び始めるだろう。彼は、戦いはしないだろうが、水を汲みに行ったり、木を集めたり、大人たちのために食事の準備をするだろう。17歳になると、彼は、闘士として始めて戦闘の集団に加わるように迎えられよう。Eagle that Singsのような若い闘士たちは、馬を盗んでくる探索隊に入って、彼らが結婚するのに十分なだけの富を持つようになるまで、襲撃に参加する。

Eagle that Singsは、彼が立派な闘士であると認められると、Real Birdは、戦いから引退することが出来る。しかしながら、Timber Leaderのように、彼は、自分は何時までも戦士だと自覚し、女たちと子供を守るために死ぬまで戦いの準備をし、心構えをしている。



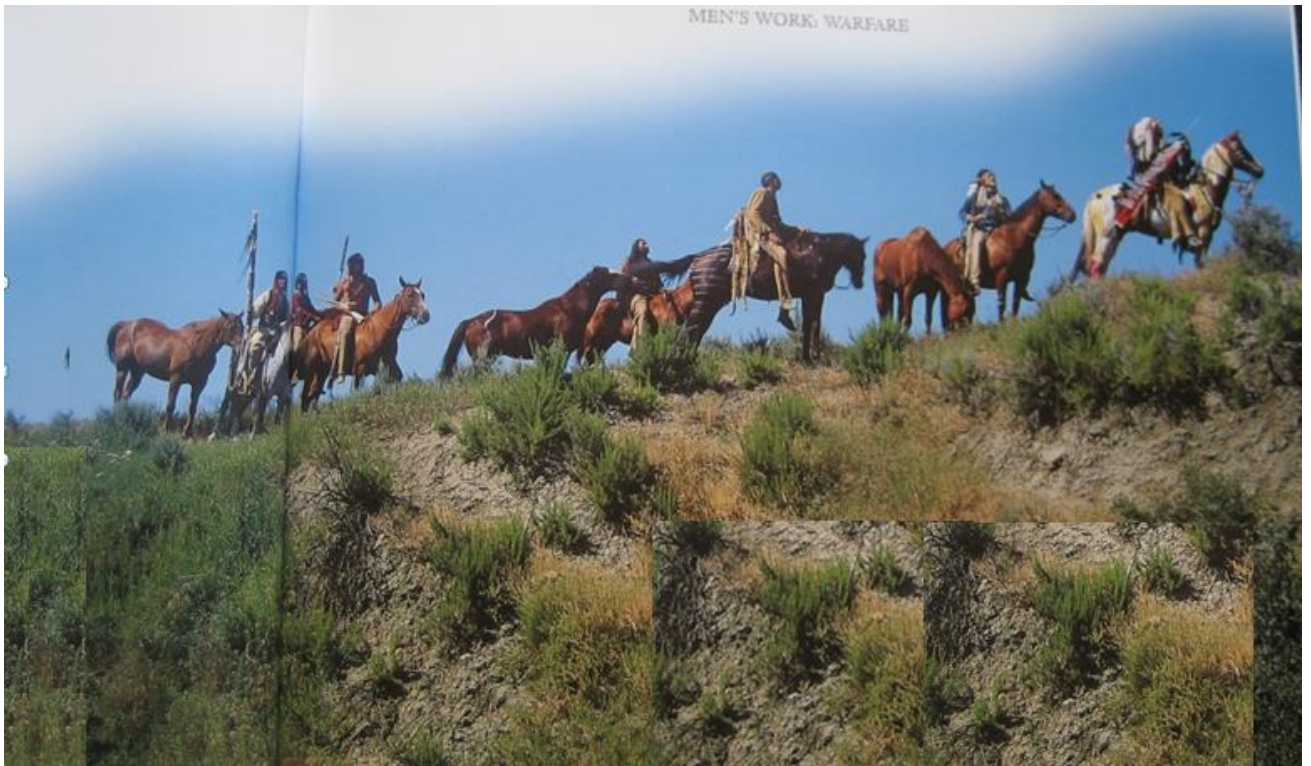
戦闘や日常生活のなかで持ち主への精神的な守護を与えるための、動物の絵、自然の力、あるいは、精神的な世界などが描かれたもの、ビーズの飾り、数珠、彫り物、あるいは、皮革や皮で作られたものなど。こうしたものは、衣服や、戦いの道具、そして、宗教的な道具に必ず施されたり、あるいは、直接、体に描かれたりしていたに違いない。

上: 戦いの戦士たちは自分の馬に精神的な守りの象徴と戦闘での手柄のしるしを描く。



下：（中心から時計回りに）二枚貝の絵の具皿と黄色の染物用の狼の毛；（上）バッファローのひずめで出来た、絵の具のサラ；小さな二枚貝の殻；三つのバッファローの爪膝蓋（しつがい）骨の絵筆；ヤマアラシの尻尾の毛の絵筆；バッファローの角の絵の具の粉入れ；描き棒；陶器用の顔料の袋；三つの絵の具の皮袋；三つの岩石、あるいは、土の顔料；模様のついた毛皮の袋

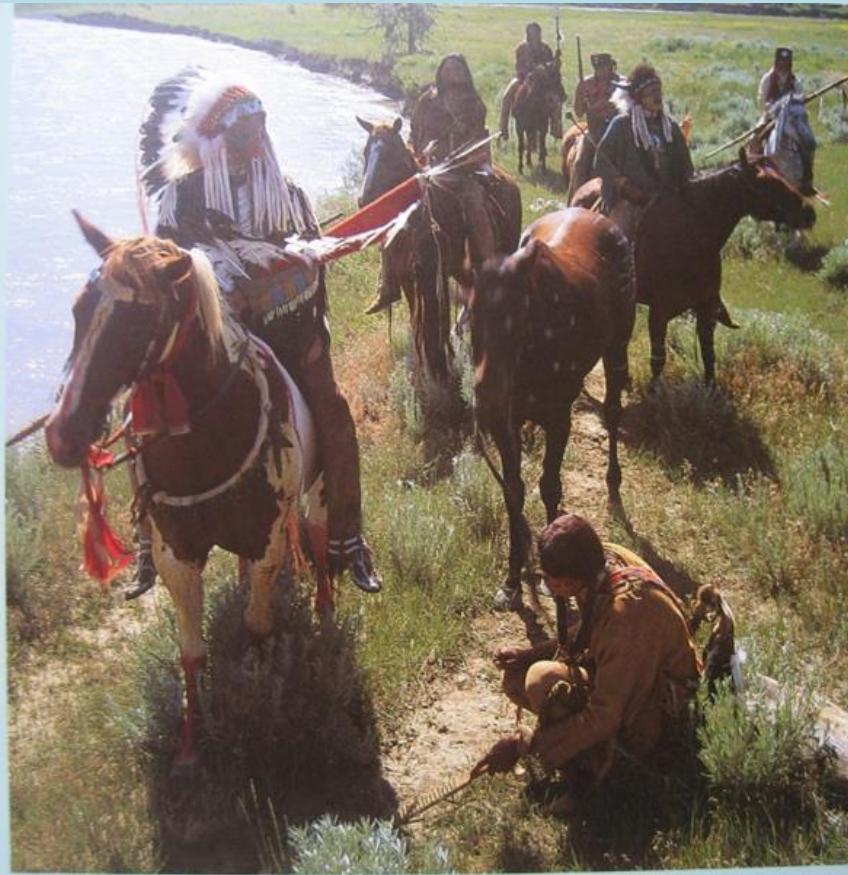
男たちの仕事：戦闘



大平原のインディアンたちは、伝統的に因縁の敵と通常は大きな戦いではなく、小さな小競り合いをして戦う。これは、かれらの戦いについての考え方つまり集団での鍛錬や続いて特別な戦闘が起こるといようなものではない—とうまく合致している。大事なことは、個人的な闘争であり、出来るだけ沢山の“手柄”や戦闘での栄誉を勝ち得ることである。“数えられる手柄”の一つの方法は、敵の背中に手で、あるいは、手に持っている棒や上掛けで自分の勇敢さを誇示するように触れることである。理想的には、生きており、武装している敵に触れることであるが、手柄は、死んだ、あるいは、傷ついた敵に対するものでも数えられる。闘士にとって自分が手柄の対象として数えられることは、栄誉を失うことを意味している。敵の馬や鉄砲を手に入れることもまた、大きな手柄であり、ある部族などでは、こうした行為は、現実に敵を殺すことよりもより高い栄誉であるとみなされている。

右:このモカシンの小さな一足は、その持ち主が 10 回にわたる馬略奪計画に参加したことを表している象徴である。





前頁ならびに上: 戦士たちの集団。戦闘集団は通常、指揮官、彼の補助者、数人の斥候、その他の戦士たちから成立っている。戦闘集団の指揮官は、彼が戦闘準備会議で使用したパイプを所持している。この儀式でそのパイプでタバコを吸った全ての戦士は、その戦いで彼の指揮権に従っていた。

前ページ下右: 老いたバッファローの首の部分の厚い皮、もしくは、背こぶの皮で出来た盾。毛皮が厚いということは、持ち主が傷つくことから防御するのに非常に重要なことではあるが、しかし、この盾に描かれた象徴的な図柄は、もっと重要である。なぜなら、それが戦闘における精神的な守護を与えているからだ。(35 ページ参照)

下: 鉄砲は、大平原のインディアンたちに最も好まれた武器だ。この写真のような矢や短めの 69 口径火打石式マスケット銃は、至近距離で非常に有効で、馬上でも用意に繰り返し使用が出来る。銃はよく装飾されることがあり、この銃は最近の戦いで手にした頭皮と、最初にこの銃を所有していた持ち主の宝石などで飾られている。長い柄のついた石の棍棒は、素手同士での戦いで使われるものである。



子供達



赤ん坊が生まれると、直ぐ

に臍の緒が切れ、これが乾燥され、お守り袋にしまわれる。これはその子供の母、そして、その母を通してのその部族の中でのほかの人そして聖霊（34 ページ参照）とのつながりを表している。信頼をされている親戚あるいは靈感を持った

人がこの子供に名前をつけることを頼まれ、少年たちや少女たちは名だたる先祖や部族の英雄たちの名前を与えられる。少女は普通一つの名前、之は、彼女が結婚しても変わることがないが、これが与えられるが、少年の場合には生涯を通じて幾つもの違った名前が与えられ、これらは、戦闘での彼の成果や、あるいは、夢想とか靈感（35 ページ参照）の中で彼に浮かんできたものなど、これらのいずれかに従ってつけられる。

右: Rides the Herd と彼の友達、バッファローのひずめ、これは大人のバッファローを意味しているが、之と、子牛とみなされる子牛のひずめを使った、バッファロー狩というゲームで遊んでいる。バッファローのつま先の骨を使い、何人かの少年たちが狩人役をする。お互いに平原で追いかっこをし、こうして、少年たちは将来自分が必要とする狩の技能の練習をする。



左: Eagle that Sings のヒマラヤスギで作った愛のフルートは、とても高価なもので、彼は之をいつも、模様の入ったバッファローの毛皮で作られたケースに入れて持っていた。





左： 投げ槍と大きな音を立てて周囲に音を響かせる事の出来る“野牛の泣き声笛”、こうしたものは子供のゲームに使われるものである。

おもちゃと遊び

大平原のインディアンの子供たち遊びは、大人として将来役目を果たすようなルールを真似たものが多い。少年たちは、戦闘や狩でも遊んでいるし、少女たちは小さなティピーの中で、小枝とか、衣類の切れ端で出来た人形でままごと遊びをしている。少年や少女たちは、ホッケーやラクロスに似たボールとスティックを使ったゲームをしているが、これは大人も良く遊んでいる。

左下に示したような台とダイスを使った賭けごとも、こどもたちには人気がある。大人も、バッファローや馬と言った、高い賭けをして良く遊んでいる。

求愛

Eagle that Sings のような若い戦士は、女性の前で自慢して見せるために、ペインティングをしたり、着飾ったりして、多くの時間を費やしている。彼女の気を引くと若い男は彼女についての誉めそやす歌を歌ったり、あるいは、彼の思いをこめたフルートの曲を吹いたりして（前ページ中央）、何時間も彼女の家族の居るティピーの外に座り、自分の思いを伝えようとするが、これは、どんな女をもそのフルートを吹く彼の恋心に有頂天にさせることが出来ると信じられている。

Eagle that Sings は、**Otter Horse Woman** と恋仲になり、彼女の家族から、彼女のティピーの居る彼女のところに来ることを認められた。彼らは、入り口に一緒に並んで立ち、**Eagle that Sings** は、ふたりの頭を大きな毛布で覆って、こうして、二人だけでの会話をする事が出来る。

結婚していない女性は、男たちと、彼らだけで話をする事は許されていないので、**Otter Horse Woman** のおばあさん、あるいは、おばさんがいつも近くに居る。



上: 少年たちが狩の遊びをしている間に、**Does Well** と **Two Whistles** が、馬やトゥボーイを小枝の細工でつくり、綿の木の葉で村の模型を作っている。

右：戦士のブーツの底を切り落とし、これを縫い合わせたもので、様々なゲームで使う、削って、色付けをした小枝をいれる丁度いい具合の入れ物となっている。



祈禱

大 平原のインディアンたちは、この世の中の全てのものは、ある一つの精霊の一部であり、従って、精神的な力を発揮する源であると信じている。彼らのは、この力を超自然力と呼んでいる。

どの部族にも二種類の信仰療法を行う人が居て、ある時には、一人の者が両方の立場になっていることもある。治療師は、折れた骨の副木や、湿布あて、特殊なハーブの処方、あるいは、大きな傷口の縫い合わせなどには、治療費を課している。彼らは良く、患者に自分たちの能力を得心させるために、そして、気分を慰めるために彼らの施術を芝居じみた演出をする。

超能力者を持つ男、もしくは、女として知られる聖人は、特別な能力、これは幻想とか洞察により聖霊から彼らに与えられたものと信じられていたが、これをもって、その力を必要としている人の精神的な欲望を満たしている。

右:熊は超自然の偉大な力を持っていると信じられている。

Timber Leader が、その力が彼に与えられるようにくまの毛皮を身にまとっている。



超能力を持つもの



夫々の人が、羽のついた薬用袋、聖なる棒、あるいは、ここで示されているようなガラガラ（左）と言ったような特殊な聖なる物を持っており、こうした物がひらめきを与え、危険から身を救ってくれる。聖なる人は、どのものを彼、もしくは、彼女の呪いの袋に入れたら良いのかを暗示したり、施術をされたひとが精神的な洞察の中で暗示を受けることを告げることが出来る。超能力を持つものは、その形、あるいはそのものにもよるので、簡単に特定することは出来ない。それらは聖人により粋を吹き込まれていなければならないし、また、精神的な儀式で使われるものでなければならない。



Vision Quest (幻想祈祷の儀式)

靈感（力）は、通常、救いを求める人が幻想の世界に祈祷していく儀式の中に存在するものと考えられている。その人は部落を離れ、そして、断食をし、精霊はどのような姿をしてもその人と語り合うことが出来るので、動物や、鳥、岩とか樹木に姿を変えてはいるが、その神からのお告げを受けることを期待して、4日の間祈り続ける。こうしたお告げが聖者によって説明される。

通常の眠りの中の夢もまた精神的には重要なものであり、力の源泉であると考えられている。男は、彼が夢の中で見たものの形や動物を、戦闘で自分を守ってくれるように盾に描いているのかも知れない。

右:スチームバスは、バッファローの毛皮で覆われた小枝を組み合わせで作られていて、清めの儀式のために使われる。スチームを発生させるために水を小屋の真ん中の焼いた熱い石の上に注ぐ。こうして、男たちは、スチームで自分たちを物理的にも、又、精神的にも清めている。

死

死んだ人は、彼のあの世への旅立ちのために、持っている一番素晴らしい衣装を着せられる。その人のお守り、食べもの、そして、一もし、その人が男のひとなら、— その人の武器などなども、バッファローの袋に入れられて彼の横に包まれる。ほとんどの部族が、なきがらを地上6フィートくらいの高さの櫓のうゑに安置する。最終的には、骨は取り除かれて、岩の裂け目に葬られる。



統治、集会、そして、儀式



大 平原に住むほとんどのインディアン部族が、彼らの指導者を選んでいる。Timber Leaderのような長老が、村の様々な出来事の決断をする村人の長としてその任に当たり、Real Birdのようにすこし若いものが、いつ戦いに行くのが良いのかなどの決定をする戦闘集団の指揮者となる。女たちの意見も尊重されるが、それは、通常、彼女たちの夫を通してという形である。

上：Real Birdの兄弟である Enters the Medicine Lodge が彼の盾と、神聖な“霊力のある包み”を儀式に備えて、太陽にむけ、その霊力を受けるように、かざしている。



右：乾いたバッファローの糞のこれらの粒（上中央）は、焼いた薬用サルビア、セイヨウコウボウ、あるいは、その他のハーブなどによって作られる香を作るための祭壇として使われる。中空のバッファローのひずめは聖なる顔料を混ぜるのに使われる。



下：パイプの筒（左上）は、ヤマアラシの針で装飾されており、これに石で出来た彫り物の煙草をつめる皿がつけられる。これらの下にあるものは、これにこうしたものを入れるビーズの飾りのついて袋、煙草入れ、バッファローの肩の骨で出来た、神聖な赤土の顔料で色づけられた煙草の台板、そして、パイプの整備道具。

煙草

パイプで煙草を吸うということは、聖なる儀式の中で重要な役割の意味を持っている。大平原のものたちが社会的な慣習として煙草を吸うように、この目的のために特別に装飾を施された煙草のパイプがある。多くの部族において、男も女も、煙草とハーブの混ざったものを吸うのは当たり前のことである。この混ざったものの組み合わせは、この世の中で生きている全てのものを表しており、そして、パイプそのものは、人間の肉と血の象徴である。煙草を吸う行動が自然界を構成するものを一緒に運んでくる。パイプからの煙は、神からの助けの貯めに求められる祈り、供え物、あるいは、要求などを表現することが出来る。



ダンス

ダンスは、大平原のインディアンたちの儀式、精霊、そして、社会的な生活の中で非常に重要なものである。それは、大地の精霊、動物や穀物を再び新しいものにし、そして、部族の活力と生活の力を保持するものと考えられている。非常に若い者から大変な年寄りまで全ての人がダンスをするものと思われ、戦闘集団と女性の工芸組織に属するものたちが彼らのダンスのホスト役を務める。

スカルプダンス、之は、数日間続くが、敵を打ち負かした勝利の祝いとして行われる。バッファローダンス（上）は、狩を描写したものだが、バッファローの頭を被った男たちによって踊られる。この踊りは、食料が少なくなったときに、村の近くにバッファローの群れが来るようにとの願いから行われる。ダンスの間、若い男たちはその群れを探しに村を離れる。

物々交換取引



大平原のインディ

アンたちは、インディアン同士、ならびに、白人との物々交換取引の長い伝統を持っている。彼らは、最初に白人の取引商人や移住者と接触するようになり、そして、直ぐに、商人たちのもっている、金属の斧、やかん、そして、鉄砲などが彼らの生活をより簡単にし、新しい衣服とか宝石を好んで保持するようなほかの人々と同じようにしてくれると理解するようになった。

馬は、Real Bird や彼の家族のような大平原のインディアンたちが取引のために差し出す最も価値のあるものである。一頭の戦闘用の馬は、10 頭の乗用馬に相当し、一頭の競走馬は、10 丁の鉄砲の価値がある。一頭の乗用馬は、普通、弾薬 100 発付きの鉄砲一丁、もしくは、バッファローの毛皮 8 枚の価値である。一枚のバッファローの毛皮は、3 本の金属ナイフか、25 発の弾薬と交換できるが、どうしても鉄砲の欲しいものは、取引商人に 8 枚から 10 枚の毛皮を差し出している。もしバッファローの毛皮が綺麗に装飾されていれば、3 頭の荷役用馬の価値に相当する。Real Bird も、取引商人に対して、狼やビーバーの毛皮や、乾燥したイチゴと混ぜ、解けた油脂で覆われ乾燥した肉できた特殊な食べ物のペミカンを提供している。ペミカンは、非常に長持ちするので、大平原に住むインディアンたちにはとても貴重なものである。

一方、白人の取引商人たちも、大平原のインディアン達に対して、次ページの胸当ての中に見られるような宝石を作るための貝殻やビーズ、そして、貝殻と骨で出来た髪の毛パイプを提供する。こうした一般的な装飾品は、数千マイルも離れたニュージャージーの白人労働者によって生産されている。大平原のインディアン達は、乾燥したバッファローの肉や乾燥した野菜、衣類、そして、高級は巻きなども取引している。

取引される商品は世界中の各地から輸入されている：ガラスビーズはイタリアから、透明な赤い塗料は中国から、鉄砲と衣類はイギリスから、そして、貝殻は、ロシアの太平洋岸からという具合である。

旅の取引商人

この男のように白人の取引商人は、村から村へと渡り歩く。そのほか、一定の決まった場所の店は、取引所と呼ばれた。19世紀の頃には、こうしたものが沢山出来ており、とりわけインディアンのわな猟師や狩人たち頼りにやってくる毛皮取引会社が多かった。男も女たちも直ぐに、どうすればうまく貴重品を見つけ出したり、うまい取引が出来るのか、そうしたことを身につけた。

ここに示されたような取引商人は、Real Birdの家族に馴染みの者で、彼は、彼らの村の娘と結婚している。こうしたことは良くあることで、一旅をしながらの取引商人の生活は孤独で、大平原のインディアンの女性と結婚することは、彼の顧客との間に親しい間柄をつくるのにとっても役に立っている。



下: 鉄砲や弾薬と同様、白人の取引商人たちは写真のようなものを持ち込んでいる。(左から時計回りに) : 裁縫や飾り物を作るための真鍮製の指ぬき; 顔の毛を抜くためのピンセット; 金属製のナイフ; 煙草の缶; コーヒー; お茶の塊; 煙草の包み; マッチ; 火をおこすための“火付け”、あるいは、着火ガラス、そして、鏡。

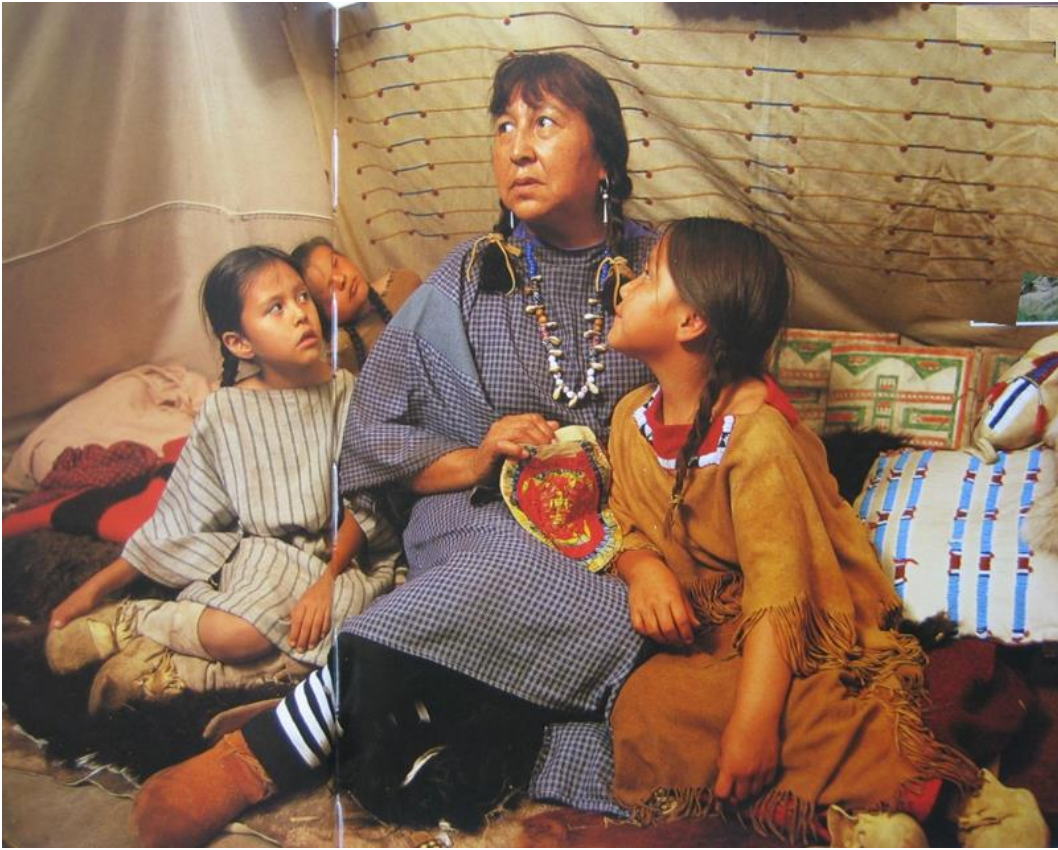


上:インディアン達は、白人の取引商が持ち込んでくるものを直ぐに自分たちで使いこなした。たとえば、この兵士が使う弾薬箱や錫製の打楽器のふたは、宝石箱に変わっていた。



上:フランスから来た真鍮製の輪やガラス石で出来た指輪は、安く、とてもよく普及している。

余暇の時間



夏

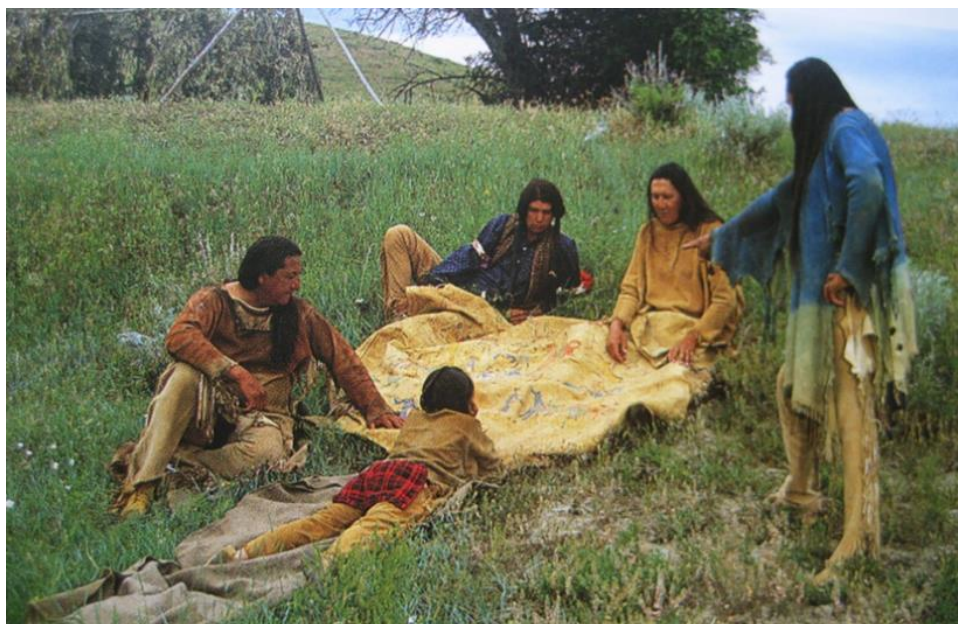
の間は、村の誰もがいろいろなことで非常に忙しく、建物の仕事をしたり、あるいは、儀式とかお祭りの用意をしている。女たちはとりわけ多忙だが、それでも、友人を尋ねたり、話の語り部をしたり、ゲームをするなどして楽しくすごく時間をうまくやりくりしている。多くの人が夜遅くまで、時には、夜通し、ダンスをしたりその他の村の出来事で起きている。

冬は、手仕事を仕上げたり、出来るだけ労力を節約して、暖を取ったり、食事の用意をするようにしている。夕方日が沈むと、ティピーの中の火だけが、暖と明りとなる。バッファローの毛皮で作られた寝床はとても暖かく、そして、寝心地がよく快適だ。春になると再び活発に働く時がやってきて、こうして、毎年同じように一年が繰り返す。

上：Brave Heart Woman
が、彼女の孫たちに、彼らが寝る前に物語を話している。長い間の経験を持つこうした人たちは、沢山の知恵を持っていると考えられており、従って、次の世代に部族の歴史を語り継いでいくのが彼らの任務となっている。



左：男も女も共にギャンブルを楽しむ。さいころは骨とかプラムの種に模様を描いて出来ている。ヨーロッパのトランプも、取引商人たちが持ち込んできたもので、とてもよく普及している。



左：Real Bird が、かれがバッファローの毛皮に絵を描いた、彼の戦闘で上げた手柄の話をしてながら友達と楽しんでいる。これはピクトグラフ（絵文字記録）と呼ばれており、大平原のインディアン達が彼らの歴史を伝えていく一つの方法だ。

右：水彩絵の具、クレヨン、チョーク、そして、色鉛筆など、こうしたものはいずれも取引によって持ち込まれ、ピクトグラフを描くのに使われている。これは、白人の取引商の手引書に書かれていたものである。



左：ほとんどの人たちが、とても人気のある馬の競走を見に出かける。戦闘や狩猟の良い馬のように、速い競走馬はその飼い主にとってもとても貴重なものだ。

兵士と入植者達



大平原のインディアン達の放牧と騎馬の文化は、大体 150 年間続き、後半の 25 年間には、外部のものとの衝突の時期となった。西部の大平原に最初に現れた白人たちは、毛皮の罫猟師達でだった。山男として知られている人達で、かれらは大平原のインディアンたちともとても友好的で、多くの者がインディアンの言葉をよく学んでいた。インディアン達もこうした白人の取引商たちと仲良くし、新しく手に入れた鉄砲とか、金属製の調理具などの素晴らしいものから沢山の利を得ることが出来た。最初の開拓者や兵士たちが来たとき、まだ沢山のバッファローが居り、そして、新しい来訪者たちが彼らの土地に住み着いたり、塙で囲ったりしないうちは、大平原のインディアン達は、彼らの存在を寛容に受け入れたし、取引を奨励するなど幸せであった。しかしながら、囊虫、天然痘、そして、コレラなどのような新しい病気が白人たちによって持ち込まれると、沢山の大平原のインディアン達が死に、そして、白人たちの酒、アルコールに、また、出費が嵩んだ。白人が、そして、インディアンも同様に、バッファローの群れを殺戮した：白人たちが最初にきた頃には、北アメリカの大平原には、40 百万頭以上のバッファローが居たが、之が、1890 年までには 1,000 頭が残るだけとなった。

大平原にやってきた白人たちは、インディアン達が伝統的に住み、そして、狩猟をしていた土地を求めた。インディアン戦争（1854—1890）の間に、多くの大平原のインディアン達は、居留地と呼ばれる特別な地域に強制的に移住させられた。こうした居留地のいくつかは、彼らの本拠地ではあったが、多くの部族は、農家が欲しがらないやせた土地の、故郷から遠く離れた地域に移された。

前頁：Alfred Jacob Miller による Laramie, Wyoming の絵。この砦は 1834 年に、山男やインディアンの毘獵師たちから動物の毛皮を買うためにアメリカの毛皮貿易会社によって建設された。1849 年に、アメリカ軍が、移住やゴールドラッシュでカリフォルニアに向かう人たちの通る幌馬車隊を守り、便宜を計るためにこの砦を接収した。

右：この写真は、（消え行く民族の夕陽）Sunset of Dying Race と呼ばれているが、大平原のインディアン達が消えたわけではなかった。彼らは、現代世界の文明にしっかりと同化して行った。



大平原のインディアン達の文化

この写真は、インディアン訓練学校に入学した子供たちを表している。このような学校は、インディアン達を文明開花させ、彼らをキリスト教に改宗させようとした。子供たちは、白人たちの衣装を着せられ、彼らの部族の言葉話すことが禁じられた。

しかしながら、民族的な問題と貧困にも拘わらず、インディアンの文化は生き残っている。彼らの言葉はいまも話されているし、北アメリカのインディアンの人口は、1900 年には 250,000 人まで減少したが、1990 年には、2,000,000 人まで回復した。

時代ごとの村の状況

ここに示したのは、Real Birds と彼の家族がモンタナの大平原に住んでいた、それ以前、その頃、そして、その後のアメリカの歴史の中で起きた様々な出来事

1800 偉大な文化と文明が、最初の北欧人が北アメリカの原住民たちと接触する前に、花開き、そして、消え去っていった。

1492 新しいインドへの航路を見つけたと信じたコロンブスが、新世界を“発見”し、そこに済んでいる人々をインディアンと呼んだ。

1493 コロンブスが 19 頭の種馬と 23 頭の雌馬と共に、新世界に到着

1519-1540 スペインの探検家の Cortez と DeSoto が旅をし、中央アメリカと北アメリカの南部地域に侵入。

1600-1700 北アメリカの大平原の人口は極めてまばらであった。東部の森林地域に住んでいた部族が鉄砲を手に入れ始め、そして、弱い部族、鉄砲を持っていない部族を彼らの土地から追い払う。

1720-1730 草原地域に進出してきた部族が馬と鉄砲、そして、鉄製の器具を手に入れ始める。

1750-1760 大草原に住んでいたあらゆる部族はもっと東の地域から移住してきた人たちとなり、彼らは、放牧と馬に乗ってバッファローの狩猟をする文化をつくった。

1779-1781 天然痘の大流行

1800-1830 毛皮の取引時代が始まる。大変広い地域で、インディアン、そして、白人の罫猟師も同様に、彼らにより狩猟が繰り返された。

1804-1806 Lewis and Clark 学術調査隊が、ミズーリ川上流とオレゴン地域を探検する。

1805-1807 Zebulon Pike がミシシッピ川の水源地を求めて、Rocky の山々を探索する。

1811 John Jacob Astor がオレゴンに毛皮貿易所を開設

1830 議会が、Jackson 大統領に原住民アメリカ人をミシシッピ川以西に移住させる権利をあたえるインディアン移住条例を通す。

1830-1870 バッファローの毛皮取引の時代：鉄砲、金属製器具、ビーズ、アルコール、そして、その他の交換項目との引き換えのために数百万の動物が殺された。

1833 南部、ならびに、中央平原のインディアンと毛皮の取引をするためにコロラド南部に Bent の砦が出来る

1836-1840 天然痘の大流行

1842-1845 John Fremont が西部の地図を作成

1843 First wagon train がオレゴンまで大陸を横断

1845 John L. O'Sullivan が大陸全土に拡大のための合衆国“自明の運命説”を著述する

1847 Marcus と Narcissa Whitman ならびに 12 人の他の入植者たちがオレゴンの彼らの任務中に虐殺される；合衆国軍が入植者の安全を確保するために投入される。

1848 メキシコが、カリフォルニアと南西部を合衆国に譲渡する。1849-1850 に掛けてのゴールドラッシュに繋がる金がカリフォルニアに発見される。

1849 Laramie 砦、合衆国の軍の拠点のひとつが、ワイオミングの旧 William 砦に、毛皮取引所として建設される。この砦の目的は、幌馬車のルートとゴールドラッシュで移住していく人の安全を確保すること。

1851 Laramie 砦と北部大平原インディアンとの間で協定が結ばれる。インディアンは、衣料や食料、そして、その他の家具とひきかえに、このルート全体にわたり、襲撃しないことを約束する。

- 1853 Atkinson 砦での南部部族とのいくつかの協定
Riley 砦がカンザスで設立
- 1854 白人入植者がスー族が彼らの家畜の一頭を殺したと苦情。軍が捜索し、インディアンのカンパに攻撃を開始。インディアンが応酬し、Grattan 中尉と 28 人の兵士を殺害、後に Grattan 虐殺事件として知られるようになる。その後、あちこちの街道で攻撃が再開する。カンザス-ネブラスカ条約が白人入植者たちにたいし、こうした領地で正式に開始する。
- 1856 天然痘の大流行
- 1857-1878 大平原のインディアンと合衆国軍との間で戦争。
- 1851-1880 年代 多くの協定が結ばれ、沢山の居留地が夫々のインディアン部族に配置される。
- 1861-1862 天然痘の大流行
- 1861-1865 南北戦争
- 1864 Sand Creek の大虐殺：合衆のシャイアン、アラパホ、ほとんどは女と子供たちが殺される。ネバダ州が合衆国に加わる。
- 1866 Bozeman 街道を確保するため Reno, Phil Kearny,そして, C.F. Smith 砦が建設される。
- 1866-1868 Red Cloud が、Bozeman 街道でアメリカ軍に対し、オグラーラスー族を率いて戦闘を指揮。政府は、街道筋の砦から撤退することに合意。
- 1868 Real Bird と彼の家族は、モンタナ州の大平原で生活している。1851 年の Laramie 砦協約が再調印される。合衆国政府とラコタ族の間で争われていた土地は、ラコタ族のものとなる。
- 1869 高速大陸横断鉄道が完成。コロラドの Summit Springs での戦い；南シャイアンのろ Dogman の勢力が破壊される。
- 1871 鉄道を守るために、北ダコタに、Abraham Lincoln 砦を設置
- 1874 ラコタ族の居留地を観察するために、ネブラスカに建設される。
- 1876 Little Bighorn の戦い：スーとシャイアンの戦闘部隊が、カスター将軍の率いる部隊を殲滅。コロラド州が合衆国に加わる。
- 1877 ネツペレスの Joseph 酋長がアメリカ騎兵隊に降伏。オグラーララコタの Crazy Horse が降伏し、四ヶ月後に拘束に抵抗して殺される。
- 1878-1886 最後のバッファローの大群が殺戮され、それに伴って、150 年の間、花開いた大平原のインディアンの文化が終止符を打った。
- 1881 Hunkpapa ラコタの Sitting Bull が降伏
- 1887 大英帝国のクウィーンビクトリアで、バッファロー・ビルの大西部劇が興行される。
- 1880 200 万エーカーのインディアンの領地（オクラホマ）が白人入植者たちに開放される。モンタナ州、ノース・ダコタ、サウス・ダコタが合衆国に加わる。
- 1890 Wounded Knee の戦い：アメリカインディアンの戦闘の終結。インディアン警察により Sitting Bull が殺される。アイダホ州、ワイオミング州が合衆国に加わる。
- 1896 ユタ州が合衆国に加わる。
- 1899 ワシントン州が合衆国に加わる。

用語集

Amulet 魔よけ、お守り 精神的な保護の意味合いを持つ護符のよう。うな小さな宗教的なもの。大平原のインディアン達は、彼らの髪の毛とか、体、あるいは、自分たちの衣服や馬具などにお守りをつけていた。

Buffalo robe バッファローのローブ 毛と一緒になめされたバッファローの毛皮はとりわけ暖かみのあるものだ。この衣装は寝るときとか、物を取引するときの交換するものとして使われていた。

Cottonwood コットンウッド鞍、お皿、棍棒、さらには、その他沢山のものを作るときに使われていた大きな硬い木質の木。上のほうの枝の皮は冬の馬の餌として利用されていた。

Elk エルク アメリカの西部州に見られた、非常に大きな数の鹿の族

Flintlock 火打ち式銃 19世紀に多くの軍隊やインディアン達に使われていた前挿入方式の鉄砲。火打石式の鉄砲が発砲されると、火打ち石が当て金と呼ばれるL字型をした金属の部品を打撃し、火花を飛ばす。これが鉄砲の火皿の中の火薬に着火し、火薬の爆発的な威力を誘起し、玉が発射する。

Great Spirit 精霊 大平原のインディアン達に崇拝されていた、最も権威の高い神のいくつかの呼び名のうちの一つ。他には、例えば、全知全能の生き物、神秘的なもの、おじいさん、あるいは、老人と言った呼び名がある。

Medicine 超自然力 聖なる力。聖人または聖女はこの力を持っていると考えられている。

Nomads 遊牧民族 簡易的な家を持ち、非常に広い地域を、食料と放牧をしながら次から次へと渡り歩く

Parfleche パーフレッチェ 持ち運び用の箱を作るために折り重ねられた、なめしていない、あるいは、生皮の材料で、フランス語で、矢をそらす、あるいは、ひっくり返すという意味。

Pictograph 絵文字 顔料（次の項目参照）で、ティピーや衣服の上に描かれた象形の絵

Pigment 顔料 衣料の絵付けや染物、ティピー、あるいは、馬具の色づけのために使われた、自然の、もしくは、人工の材料。大平原のインディアン達は、顔料を、飾りをするためと、太陽の日焼けを防ぐ、その両方の目的で自分の体に塗っていた。

Prairie 大平原 ミズーリ川からミシシッピー川にかけての、非常に広大な草原、もしくは、ややなだらかな地域。森林はあまりないが、肥沃な土地と、穀物が育つのに十分な雨量がある。西部の地域は、雨が少なくて穀物を育てるよりも動物を飼育するのにより適した自然の 高原地帯に連なっている。

Rawhide 毛皮 （肉側と毛側の）両方を綺麗に削り取り、これを延ばして、半分、固まったように仕上げた動物の皮。

Reservation 保護居留地 夫々のインディアン部族、もしくは、集団が使うように確保された地域

Scout 斥候 ガイド。その土地をよく知っている斥候は、バッファローの大群や敵のような追求物を探しながら、狩猟や戦闘集団の先頭に立って旅をしていた。彼らは、それを集団の指導者に報告していた。

Settler 入植者 1850年から60年代にかけて、こうした開拓者は、渡り鳥としても知られているが、彼らは、頭部地域の入植地を残して、合衆国政府が手に入れたばかりの西部地域にはいり自分たちの新しい家を建てた。彼らは、幌馬車隊として知られている、カバーのついた馬車を連ねて大きな集団となって旅をしていた。

Sinew 筋 いろんなものを縫ったり、結んだり、あるいは、修理したりするために糸のように使われた動物の腱

Tipi ティピー バッファローの毛皮、エルクの皮、あるいは、帆布で作られた移動用の円錐形のテント。（ウィグワムは、良くティピーと間違えられるが、之は、木の皮で作られた小屋）

Travois トゥボーイ 木の柱から作られたA文字の形をした道具で、之を馬の背中に付け、重い荷物を引っ張って運ぶために使われた。

Yucca ユッカ 真ん中の茎から頑丈で、剣のような葉の枝が出た大きな植物。コケは。火をおこす道具や、石鹼に使われた。柔らかくて、ナッツの匂いがするような実はさ食べられた。

INDEX

A

Alberta, Canada 9
alcohol 42
ammunition trade 38
Arapaho 8
arrows 26, 27
arts *see* decorative arts
Atsina 9

B

babies 32
barter 22
beadwork 24, 25
bears 9, 34
beds 18, 40
birth 32
Blackfeet 6, 8, 9
body painting 29
bows and arrows 26, 27
bridles 11, 18
buffalo 4, 9, 10, 19, 26
 buffalo dance 37
 in decline 42
 hides 15, 16, 17,
 19, 24, 30, 35
 see also hunting
bull roarers 32

C

camp 14, 15
card games 40
celebrations/ceremonies 9, 14,
 15, 16, 28, 29
 gatherings/festivals 36-7
 pipe smoking 37
 purification 35
Cheyenne 6-7, 8
children 10, 12, 14, 18, 32-3,
 43
clothes 6, 8, 13, 15, 20, 24, 43
 buffalo robe trade 38
 death rituals 35
 Grizzly Bear Men 9
 women's 7, 24
clubs (weapons) 31
Colorado 6
coups in battle 30
courtship 33, 36
craftswomen 24-5, 40
Crow 6, 8

D

dancing 36, 37, 40
darts 32
death 35
decorative arts 7, 15, 17, 20,
 24, 28, 38

disease 42
 see also medicine
doctors 34
Dog Society 7
dogs 10, 16
dreams 34, 35
drink 22, 42

E

elk 27
embroidery 24

F

family, importance of 12-13
festivals *see* celebrations/
 ceremonies
fire 21, 23
food 13, 14, 15, 20, 21, 22,
 36
 scarcities 37
forts 4, 42
furniture 18
fur trade 38, 39, 42

G

gambling 32, 33, 40
games 32, 33, 36, 40
gatherings *see* celebrations/
 ceremonies
gold rushers 42
government 36
Great Spirit 32, 34, 35
Grizzly Bear Men 8, 9
guns 31, 38

H

hides *see* buffalo
historical summary 44-5
horses 10-11, 13, 16, 20, 28
 horse-stealing 8, 28, 30
 racing 41
 for trade 38
hunter-gatherers 4
hunting 10, 13, 15, 26-7
 hunting bands 6, 14, 15
 hunting games 32
 see also buffalo

I

imported goods 38
incense 37
Indian Wars *see* warfare

J

jewelry 31, 38, 39

K

Kansas 6

L

Lakota Sioux 6
languages 6, 42, 43
leisure 40-1
Little Bighorn, Battle of the 4
love flutes 33

M

marriage customs 6, 13, 32,
 39
meal times 22
meat 22, 26, 37
medicine 34-5
 see also disease
men 20, 21
 hunting 26-7
 warfare 17, 18, 28-31
 see also courtship
moccasins 24, 30
Montana 6, 9, 12
mountain men 42
music 33

N

Nebraska 6

O

Oklahoma 6

P

painting 7, 11, 24, 28, 29
 paints 37, 41
parfleches 15, 19
Pawnee 6
pemmican trade 38
pictographs 41
pipe smoking 14, 29, 31, 36,
 37
polygamy 13
population statistics 43
protective symbols 28-9, 30,
 35
purification ceremonies 35

R

religion 18, 24, 29, 34-5, 36,
 43
reservations 42

S

saddles 10, 18, 24
Sarsi 9
scalps 31
 scalp dances 37
schooling 43
seasonal work 20, 40
sewing 24
sheep, bighorn 27

shields 29, 30, 35, 36
shops 39
Sioux 4, 6, 8
smoking *see* pipe smoking
soap, yucca 21
storytelling 36, 40, 41
sweat lodges 35

T

tanning hides 19
tipis 14, 15, 16-19, 24, 29
tools 15, 20, 21
 for eating 22
 firelighting 23
 tanning 19
 for tipi 16
 weaponmaking 26
toys 32
trade 4, 11, 13, 25, 38-9, 42
transport 9, 10, 16
trappers 42
traveling 11, 14, 15, 36
travois 9, 11, 33
tribal gatherings 36

U

U.S. Army 4, 42
Ute 6
utensils 22

V

vision quests 35

W

wagon trails 42
war parties 31
warfare 9, 12, 13, 28-31
 horses in 11
 Indian Wars 4, 42
warriors 9, 11, 15, 28-9, 30,
 31, 36
water supplies 9, 15
weapons 6, 18, 26-7
 guns 8, 31
 trade in 38
white settlers 4, 8, 38, 39, 42
wickiups 15
women 13, 18, 36, 39, 40
 crafts 24-5, 40
 prepare food 20, 22-3
 set up tipi 16-17
 tan hides 19
 see also courtship; marriage
Wyoming 6

Y

yucca plants 21

Places to Visit and Acknowledgments

Forts

Bent's Old Fort National Historic Site
35110 Highway 194 East, La Junta, Colorado
81050-9523

Telephone: (719) 384-2596

Fort Fetterman Historic Site
752 Highway 93, Douglas, Wyoming 82633
Telephone: (307) 684-7629

Fort Laramie National Historic Site
National Park Service HC 72 Box 389,
Fort Laramie, Wyoming 82212
Telephone: (307) 837-2221

Fort Larned National Historic Site
Route 3, Larned, Kansas 67550
Telephone: (316) 285-6911

Fort Phil Kearney State Historic Site
P.O. Box 520, Story, Wyoming 82842
Telephone: (307) 684-7629

Fort Union Trading Post National Historic Site
15550 Highway 1804, Williston, North Dakota
58801
Telephone: (701) 572-9083

Museums

National Museum of the American Indian
Alexander Hamilton U.S. Customs House,
1 Bowling Green, New York, New York 10004
Telephone: (212) 668-6624

Buffalo Bill Historical Center
720 Sheridan Avenue, Cody, Wyoming 82414
Telephone: (307) 587-4771

Colorado Historical Society
1300 Broadway, Denver, Colorado 80203
Telephone: (303) 866-3682

Knife River Indian Village National Historical Site
P.O. Box 9, 4201 Stanton, North Dakota 58571
Telephone: (701) 745-3309

Little Bighorn Battlefield National Monument
P.O. Box 39, Crow Agency, Montana 59022
Telephone: (406) 638-2621

Oregon Trail Interpretive Center
P.O. Box 987, Baker City, Oregon 97814
Telephone: (541) 523-1843

Museum of the Plains Indians
P.O. Box 410, Browning, Montana 59417
Telephone: (406) 338-2230

Acknowledgments

Breslich & Foss would like to thank Kennard Real Bird, Jack Real Bird, Jim Real Bird, Henry Real Bird, Ramona R. Real Bird, Shawn Real Bird, John Real Bird, Mark Real Bird, Polly Real Bird, Lucy Lee Real Bird, James Real Bird, Sloane Real Bird, Jessi Real Bird, Terry Anna Cummins, Nicole Cummins, Kordell Cummins Brandon Yellow Wings, Hartford Lee Bear Claw Tiffany Glenn, and Roy Martin for acting as models and for the use of their land and horses

Picture Credits

Thomas Gilcrease Institute of American History and Art, Tulsa Oklahoma: pp.4-5 (bottom)
Glenbow Archives, Calgary Alberta: p.4, ref. N4 936-34 (top right)

Joslyn Art Museum, Nebraska: pp.42-3 (top center)

National Anthropological Archives, Smithsonian Institution: pp.42-3 (bottom center), p.43 (top right)

Princeton Collection of Western Americana: p.4 (bottom center)

Royal Canadian Mounted Police Centennial Museum: p.4 (top right)

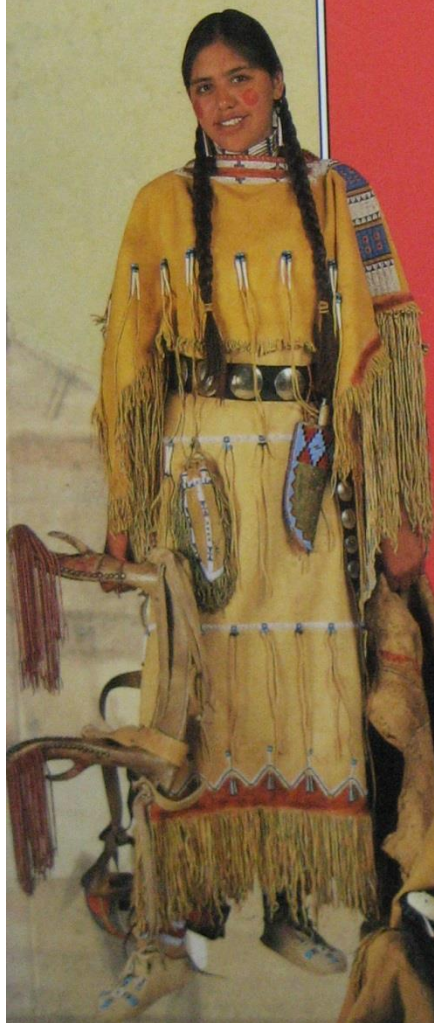
All clothing, regalia, tipi furnishings, and horse equipment made by Michael Bad Hand Terry, except: tipi interior, pp.18-19, beaded moccasins p.24, and paint bag, p.29, by Roy Martin; large grizzly bear claw necklace, p.34, by John Arrasmith; and painted rawhide bags pp.15, 39, and 40, by Ivan Hankla.

Village set technicians and assistants: Jason White Dog Terry and Silas Sky Mentzer.

Landscapes, tipi interiors, and artifacts were photographed at the Little Bighorn Battlefield site at Gerryowen, Montana.

Daily Life
in a
Plains Indian
Village
1868

Michael Bad Hand Terry



Daily Life in a Plains Indian Village 1868

A fascinating and detailed inside look at the daily life of a Plains Indian family more than 130 years ago

Packed with vivid, full-color photographs that show the family members and the items—from arrows and shields to games and sketchbooks—in their tipi home

Highlights the duties of each family member—including the children—and their roles in the larger, tribal community

Clear text is accompanied by sidebars, detailed captions, timeline, and glossary

Includes a list of places you can visit for a re-creation of this important aspect of American history